

誰もが社会の一員として、助け、助けられることで、この社会は成り立っています。それはつまり、自分の勤労や生活そのものが、知らないうちに誰かの役に立っているということ。どうせなら、その職業や勤労が生計のためだけではなく、能力や適性を発揮でき、より充実感や達成

志あるところに道は拓かれる

感得られる場であれば、なお幸せです。今の子どもたちは、間接体験や疑似体験は多いのですが、自然接触、縦集団行動、自発的活動、社会参加、勤労、困難などの体験に欠ける「欠損体験」が指摘されています。人は自らの経験をもとに、生きていく上でのさまざまな判断をし、行動していきます。直接体験がなく判断基準が乏しければ、自分にとって何が適正なのか、能力なのかさえ判別できません。さらに言えば、自分のやりたいことが分からないから意欲もわかない…。ニートやフリーター増加の要因は、雇用状況の変化だけではないようです。そのような視点からも今回の中学生職場体験は、それぞれが実りある人生をおくるためのヒントとなったに違いありません。開拓した、大成した、一つのことに長けていた…。そんなフロンティアに挑み、得意技を生かしてきた先人たちは、みな少なからず志を抱いていました。そこで、子どもたちには、大海を越えた郷土の高僧の生き様から何かを感じ取って欲しいのです。志が立てば道が開ける、志が高ければ果てしなく視野が広がる、志は自分の魅力として表れ、そこに人ととのつながりが生まれる…。無隠元晦は「志あるところに、道は拓かれる」というメッセージをはるか南北朝の時代から、今この町に生きるわたしたちに投げかけています。

開山堂開帳

通常是非公開の県指定文化財「無隠元晦坐像」が650遠忌法要で公開されます。(入場無料)

日時 10月4日 土 10:30～
場所 天目山興国寺(上野)

episode five エピソード 5 將軍、副將軍、守護が厚遇

有力者が惜しみなく援助

無隠元晦は元に渡る当初から、豊前国の守護である大友氏から父子三代にわたって支持されます。特に大友貞宗は元への留学費を援助し、無隠元晦が悟りを開いたことを知って大変喜び、感謝の書簡と砂金を中峰明本に送りました。また、足利尊氏、直義兄弟は、興国寺を安国寺の随一に指定し、寺領を寄進。それら破格の厚遇から無隠元晦の徳の高さがうかがえます。なお、興国寺には数々の尊氏伝説が残され、安国寺についてわが国最古の資料となる興国寺文書は県文化財に指定されています。

宗教に補うことなし

無隠元晦の絶筆(最後の手紙)ともいえる書簡が法雲寺(茨城県)にあります。元の国で厳しい修行をともにした復庵宗已にあてたもので「宗教に補うことなし」(宗教に寄与することができなかった)と自らの生涯の業績を省みています。「雲のかかった山(福智山)を見て、ますます修行生活と友を恋しく思う」との内容をしたため、死期を前にして心から旧交を懐かしんでいます。

その人柄を知る7つのエピソード

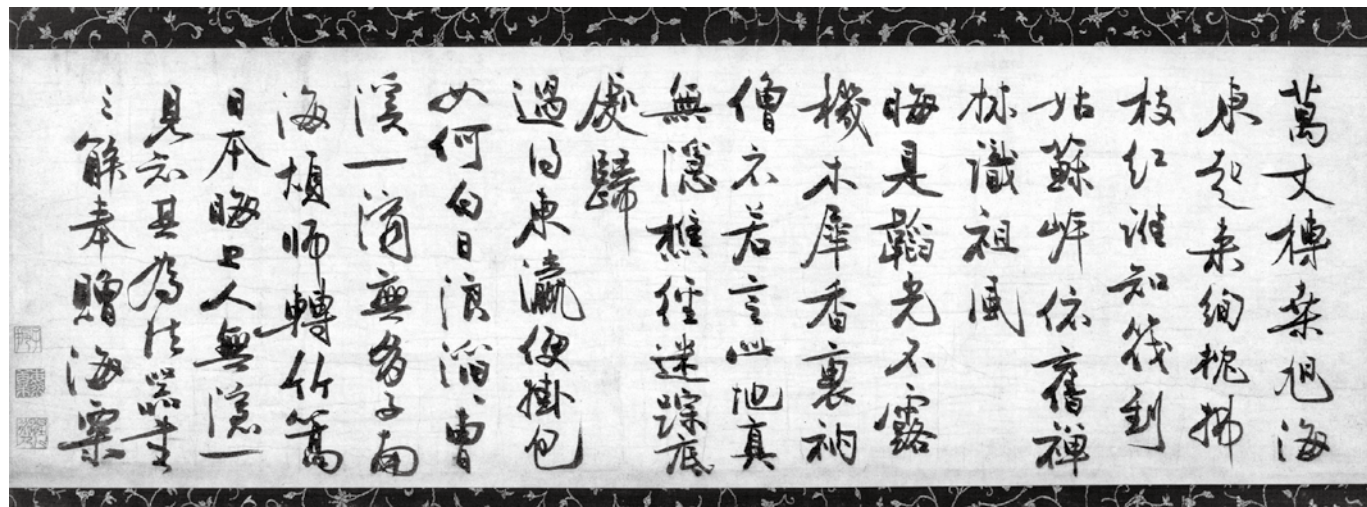
原点回帰

官寺(国家の寺)で頂点を極めた無隠元晦。晩年は京都の禅宗界でつづがなく過ごすこともできましたが、故郷の福智山麓へと移り住みます。ここで師である中峰明本に習って隠棲し、幻住派らしい余生を全うしました。当時、興国寺は天目寺と呼ばれ、無隠元晦が修行した元(天目山)にも由来しています。



扁額に「天目山」と掲げられている興国寺の山門。

与無隠元晦詩／馮子振 国宝 東京国立博物館所蔵 Image:TNM Image Archives Source:http://TnmArchives.jp/



episode one エピソード 1 元の国を代表する文人の心をつかんだ

一見にして大器を知る

かつて王朝に仕え官途を歩んだ馮子振は、無隠元晦の師である中峰明本と親交が深かった元の国随一の文人で、大詩人かつ名筆家。その彼が、日本から渡ってきた無隠元晦を一見してその法器を知り、3首の七言絶句「与無隠元晦詩」を揮毫して贈っています。馮子振の60歳ごろの作といわれるこの書は、個性的な文字の造形と筆運びが特徴で、紙をえぐるような才気にあふれたもの。国宝に指定され、現在、東京国立博物館に所蔵されています。この他にも馮子振から無隠元晦に与えられた語が伝えられ、馮子振がいかに無隠元晦を重んじ、彼が元で名を馳せたかが、うかがえます。

episode two エピソード 2 命がけて信念を貫く

水難の相

骨相師(占いの師)が「水難(水による災難)の相がある」と無隠元晦に指摘し、元への渡海を勧めましたが「私は今、法を求めている。法のためには身を顧みない」と、まったく動じなかったそうです。無事帰国した彼を見た骨相師は「至人(道を修めて極致に達した人)は測るべからず」と大いに驚いたと伝えられています。

episode three エピソード 3 当代随一の禅僧である師が絶賛

才徳をひけらかさず

当時、元屈指の名僧であった中峰明本。そのもとで6年の修行を経て悟りを開いた無隠元晦に、印可(認可)が与えられました。その書の中で中峰明本は「無隠が禅道を大悟したが、外にあらわさず堂々として自然にあらわれ、共にいると清風のようにすがすがしく感じる」とたたえています。

episode four エピソード 4 師のため帰国中止

墓守三年

無隠元晦は悟りを開いた後、元の国の諸山にいましたが、帰国を前にして、師である中峰明本の死去に遭遇。これを悲しんだ無隠元晦は帰国を取りやめ、天目山に戻ります。そして3年もの間、日本から元に渡った友である復庵宗已らとともに中峰明本の塔を守り続けました。喪に服した3年後、ようやく天目山を下り、帰国の途についたといえます。なお、逆に無隠元晦が亡くなった際には、のちに高僧となる大拙祖能が中国から帰国し、興国寺で3年間その塔を守ったと伝えられています。

見る角度によって違った表情を見せる無隠元晦坐像

